



歳旦

辛丑

青陽

北澤氏藏書

當年番


眼さゆ〜小先み〜形や無地云 元月

貢よのほむえ日れゆ心 素丸

あ〜〜〜通濤の精りて 眉雲

春真

垣向了了子成出〜〜春の芽

廿月

年尾

乾鐘此煤とおさめぬ矣乃店

五

東帝

者傍

天地菴

後帝〜〜光中柘の〜乃春

素丸

〜〜鶴の喜れ價千金

茂楓

佐深娘の姿見了〜〜哉多

徳布

三篇

しづかき世哉一言や白梅

カ丸

年尾

いそしき世哉一言や白梅

立

頌

管子不遠りし其堅固をた

鏡ゆき瓊姿法麁梅の春

蛙水

けしとや糸代のゆり及松の音

判板のまを定ふ

我がしづかき世哉一言や玉の音

風葉

春まきの屏風鏡もや年一夜

風まきもまきかきく我の音

曇

かく々の糸梅ふ引て雪解ふ

た静まや思ね二言はれ代のま

我泉

前法師の紙巻をよみうらむ

金浪が 仁と狐や 小海日

侍七十の父をいふ一少 屠蘇の 泉や せむし

高日 西菓の 菓重や 湯取 猿籠

く月 日さ 洞 妻も 好はるの

小 吟を 既 陀了 掛さるし 世帯

あ げくと 羽 少ら 携 帯ふ

遊 水てい 嵐 じ 掃や 梁の 鏝

頌 同 金町連

横雲乃 翠 簾うら 祭 初日

けしと 小 後川 下 舟 舟 遊う 舟

妬 々 君 来てい 化粧 ぶや かし 餅

生 餅乃 振 もて ころや 大 海 日

侍 けしと 金 附 け 牛 ころと 羽 籠 雲

金 浪乃 ころと 世 車や 大 二十 日

頌 下 総 市川連

長 子乃 や 笑 び 上 戸の 人の 志

下 戸乃 先ッ 咲い け 志う け 咲

春 ぶら 上 戸め て ころと 乃 春

里川

眉日

至恭

巨柳

寸智

久考

驢化

栴戸

餅搗や下戸の建ちたる花もけり

門松やをい陰陽の西より

人へ落館お奉の奉りか

帷雪

頌 上総 東白連

角は女五人乃て落や玉のもの

嵐段 如髪

花季ふやふとよの道はつらせ

菊葉やと月日ふ舞は浮上り

瓢水

行と姑猶了る月の音なり

初床是松よ紫鷹の羽をり物

雨苔

雛落やまきり月の好語じ

とろ水のまや流るる星を新

富山

餅搗や流の世話もを片め

頌 安房

蓬菜乃隣おそや富乃春

市井系 素落

一川つ火流かすうと流

く川は流や不二をを向は掌

素玉

久思乃自在やとりの市原

久事さの親子の中や花のま

大島 紫流

窮屈の人に入きまじりての意き

徒然と栴々花のあつた小

月よみ侍夜ふりりうう筑

大黒お笑ひうう屋やと船のま

ゆととちあふてつととん神酒陶

頌

真州 築川連

遠来の礎かこもつて又出

隣(と)ももつて吾日つり小海日

くつととちやう冠がふ辰初め

簀山

魯紅

素州

素石

掃拂や足も独り大離箱

ゆうみふりあつた代の手や門の松

おもかともま(と)とととととととと

老とふ字は書とちやあつたま

今片とふ屋の知りや心の化

頌

下野 足利連

今約の長伝(和)以白の塵 茨

松ともあつて(と)とととととととと

四方の浪志(和)ふりり浦のま

野馬

曲子

素州

白糖

三鳥も後口姿やうしけり
 市代乃まふ風もさしあめ初日は
 蓬萊少々春中合まや年世閑
 蓬萊や海原に廣くまふまふ
 〇の坂我も張あやみまふ
 一さりくと雲を四つ玉はま
 縁掃や道り足もまふまふ
 今朝のまふふ静世の事始め
 まふのまふへは初あうしけり

素樓
 核雪
 魚丸
 霍阜

頌

八の身ハハ考つてひて三川の朝
 〇の市にまふや和漢乃販物
 えりやうほいいいしなうち山
 山文てしつた白く師走富士
 颯々の麻上下や門の松
 丁子に梅ももふや〇の宿
 蓬萊や老の吟いぬあか茶
 日の数もたふまふまふ衣をり

八十三叟
 移文
 胡光
 一之
 其枕

文を説いて

校へくは七坂餅とや千代のま 李風

松葉なると買とやの市の土産 〃

まじり起てまゝ我様とや饅餅 麻波

生々居た便は姪一衣へたり 〃

身門乃まゝもく川島の魚り舟 漢水

合よりいそぬ室や除衣乃梅 〃

いさだ能神代もろふそ乃ま 又水

人若此片のき初めやすくこゝ 〃

元日の子とおこそつ小戻りこゝ 去後梓祭 禁終

掛乞い屋の抛竹は合 〃 梨

野充賣れを初もより玉のま 竹光

月い花の懐りして除衣乃梅 〃

あゝよた森や仮名のい川唐 五雷

傾城の突りり少お師走哉 〃

と信廣さすまはまら日此妻 桃金改 逸右

高ひる舟乃りふけや羊の梅 〃

七曲の〇らもぬけても川景 素海

令梅際出ても師走乃月の瘦 〃

まゝのや 鹿着く足て峯乃以 初牛
往來ふふ雲後とくはくのみまや

頌

山も川や 聖武延喜の御代ら 眉雲
あゝとと塵よせはけぬ柳のれ おりく
子暎八月夜不越きやの坂 立
海止の第月又くく 今終のま 古洞
柏子小冬梅咲をりり 帝季ん
傾城乃毎もま紫や 松のま 化合

日の裏ア あまの 海世も 肝をふ
十五城も 治罪一 玉乃 春 五十
くや 咲を 困ん の 雲や の 紫
松乃 了 足し 一 戦く や なる 紫 白雅
の の 漸 不 破 なる ま や 室 なる
門松乃 喜 成 神 乃 や 足 乃 の 虫 桃月
情 乃 て 押 や 牽 も と 一 此 坂
え 乃 や 一 居 翻 一 一 此 乃 亦 の 雲 砂 明
雲乃 了 喜 を け 初 乃 師 乞 乃

くひやを 緑を 流る 門の 松
うらむ 舟を 直か 舟師を 舟
桐生る 松風 さら 舟の 舟
めつ 舟の 舟 舟 舟 舟

頌

馬喰町連

空も 今 羽分 根の 想や 舟の 舟
舟 舟 や 舟 舟 舟 舟 舟
七ツハ 教め 舟と 舟 舟 舟 舟
えりや 富貴 舟を 含む 舟 舟 音

足取 事 舟 舟 や 舟 舟 の 舟
門松 や 舟 の 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
えりや 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

後寺州あすはくふも蒼りし衆 我江

弓川さくや雪の儲やうし此著

橙可一玉の光りや門のそふ 僧 居樂

帝幸しや松と井との二人連

はくぬのや威勢い主此門のま 女 かゑて

りしと此能を小咲や後詩系

老もと物さるた咲老や屠獲残煙 赤根

煤も三帝一既中きしはた菓子袋

頌 桑野連

さくく如我ををそと通る日の出りし 鴉蛋

樹とア一まふかーや忍ふの安ー

は清りや山の笑ふもは 悪く 鳳吹

まゑさくくも遊り系(ゆく)〜れ

けとさア一まの緑やと川 硯 我窓

と〜もとや葉一浩く我横日象

と川さくや藤子の茄子も人〜後 僧都 鄭坡

後や仁王の白眼む門一さ〜

頌

糸とつふ寶がつかぬかたけり素

赤山

免山

いづれの手もかまはずとにたてして
いさだこゝろのあきらむらん

息あつてあらいくもくくの坂

釋くわいのあつた
會熱をいふかきとるや

お性いふ之く今初の屠蘇さかん

濂堂

川とくやさふは割るは戸の晴夜

右桃

顔のく伸けて入るやかく餅

右桃

川とくは秋登いふく一と臨の里

汶里

二日少は秋登添てふふのふ

汶里

とくは尾いんきくく雪降ぬ

陶渚

豊土のおゆるや今初の牛のま

陶渚

まくくとのふのく載せやとく此筆

み雲

質斗がふのあをきくくく月日

み雲

子御者およく舞う月田や衣記

千路

吟積や例くく結乃せく月穂

千路

日の本乃世帯くくくやの市

素友

朝紀の癖を附くく初日のお

素友

張くくくくくくくくくくく

素友

静さや笑顔此花乃か員 餅 葵丘
いせ海老や肴をくもくくくの歩

頌 下総 鬼越連

一とせ此塚本ありや 月夜下 秋郊

源君くく信ア 炬燵の師走の家

川きりやうねと屋上の父也毎 鳥吃

世の塵のほりて暖く大晦日

ゆつとくと霧の才振や初日の出 清泉

襟裾や風折鳥帽子立急なり

頌 常州 車歸連

天地乃ア、と閑やとろかくも 魚水

愈々此りや二階ア 墨見うか

屠蘇の番に嗽くやゆ乃ま 蓮京

溪砂の歩くや、くくくくくく

頌 堺町連

えりや 墨見あろ此懐口 手 素月

おおんア 熊坂出くくくく

まきりや、くくくくくく代のくく緑 栞志

餅搗や〜是〜〜を伝ふかり

えりや〜とせの中にも和音の浦

余は小舟で〜の事や〜の著

〜の月を〜
〜の事や〜初るや〜の事

い〜〜や〜夜や〜の梅

雛鷹の〜と並ぶや〜初日の虫

蒼ち〜は〜一〜の梅

〜色も〜ぬまや〜の雲

来たよ〜の藩〜の市

、

光雪

、

二落

、

桂山

、

柳志

、

我り庭の梅は〜え〜今朝の云

樹と〜笑ふや〜の福寿州

日の歩〜半はあゆ〜や〜赤代乃春

校〜は冷〜こ〜此柳ふ

〜あや日を汲むげおふ代の云

老松も乃盛ありき〜と〜著

あ〜〜此磨りねおぶ〜月日

子のま〜の丑〜磨りて〜筆書ぬ

一〜次〜開〜や子代乃玉牡丹

努志

、

夏曉

、

平國

、

紫扇

、

雪白

人亦後まても後水より此餅

頌

ふふ〜此是見ひ〜や初展 素花

梅咲てまふ事新く夜ま此禁う那

向松や二葉を回〜神代より 思元

浅人金乃蔓く〜蔓ア〜一秋

よあふ此葉より出さ〜や車井戸 孤友

若〜ゆ〜世の秋きや〜様〜の

富士部〜川世の上辰や乃のま 庭十

振〜ふ〜智恵の海はるや〜の真

橙乃一葉やまふ葉かさ〜叫 其誰

針出〜て〜此をぬりや松林

静〜す〜秋海〜様〜ふ〜月〜 免遊

牛〜と〜葉を馬〜走〜せん〜

ゆ〜ふ〜ゆ〜や〜お〜吟〜ふ〜幸〜代〜の〜 波心

ま〜ま〜る〜や〜ま〜の〜早〜く〜此〜様〜の〜向

遠葉〜了〜我〜方〜乃〜ま〜ま〜の〜ま〜ま〜の 杉司

魚〜ら〜り〜や〜蝙蝠〜乃〜夜〜を〜花〜歩〜り

一面了中風くけり山がさり
五出
様掃やふりふき庭の浄る巻

頌
相州 大山連

えりやありの候す人こほ
山上 素丘

げ月あつては返んてはや年の雪

岩の戸をあつてはさふる月日
巴陵

すく掃や雪あつてはさふる月日
義と笠

改てうふいたふり
中山乃云
萬谷

世帯しも帯帯ふれ若合せり

えりや看格してはさふる月日
素柳

日も聖へ
けりけり
素秀

松葉と梅の白ひや
現 麓

粒金乃所走き星は花夜舟

屠の稗の巻は種り
出る船や初辰
吳山

子の目奥おのりては
小松より

一掃り陽氣こり
梅のま
素秋

きりもあつて目お
やすけ
素笔

内松や山落の風乃都
素笔

蛾乃り一糸乃ちりくく此市

木乃牛も初くま合ふや向のま

巻牘の目と旅よりり 古巻

書よめやす八糸の葉小梅二梅

りくくやほまぬ梅子のぬ車

頌

梅く待くくふま竹や花のま

おくふくくまま川巻や梅拂ひ

蝶鳥やまや今初のまま

右く巻巻乃真やうく此蘭

乃のま納くくまむやく月日のお

まらゆ子秋樂や一年此著

笑忠乃自ひも廣く初出

ふ部く川星(おろまや一年想夫

す掃の狩衣室く一草物

静さや雪く一掃く朝

りくくま追ひくくも是くく

まくくくやお行く為姑のま

素牛

古巻

五成

ぬ車

頌

二蝶

梅拂ひ

巴柳

此蘭

次維

一年此著

登貞

一年想夫

鯨巴

菊羽

くく

逸窓

蚕飼ふふふあつふふ青うね
行々此暮るまわり夕日さけ

頌

房州連

えのやせはてせふふふち

會

逸雅

胎内了みおこつ後し年一夜

孟乃考り長閑事一之川の船

舎

蓮守

吾降て何ふ是る一のこれ

並婆娘さたといきひ今船のまはし

僧

晚雅

うけえも出島乃は事や八千度

南朝一都(あつ)と船は云

素民

まゝいもなつて遊りり掛はる

老女事あつて海や門の松

買風

春一人を遊びおの除却の陸

旧く此垢清めりりも水

雪窓

りりなぬとや室はあゝ宿

人の氣も子をまゝあやあけのま

僧

素遊

川くや流るるれ名るる

羽子板了りしきまゝて日を水さ

夜来

や〜や馬乃眼をわ〜人
 神の氣ふ志〜く〜や初手水 養人
 聖笑ふ用言や陰夜の梅の香
 松竹小妹脊乃糸甲か片り葉 菊人
 我哉出〜て笑ふお梅も〜高枝
 彩〜〜其香死々や華の春 李言
 二之輪梅の早あ〜葉〜〜此宿
 居蘇くむや〜其香も家の福壽州 遠声
 家里も都〜し〜りの様も〜

居蘇乃香了静も思〜く〜玉乃春 素溪
 山〜〜山〜〜り海下や春葉
 立岸 耳順にあつて母を喜ぶ 我又老来子 千里
 家々〜ふ母乃杖あり〜の坂
 梅の香い松乃白ひや初日此出 望月
 一〜波の汐満来〜り様も〜

頌 同

蓬萊や海空ふ〜の香〜もの 素来
 愈乞の迄〜〜〜や不老門

人も気の星にさゆりしと鈴の音
素節
一川掃て年も界や除夜の鐘

頌 同 千代連

えのや其の燈乃に花くもり
素山

漕はきて雄雄とくは漆うさ
許流

舟も山も笑ひしはきてとけり
許流

梅の香は鏡い口や除夜乃鐘
芳朶

袋よと風をたさめてとつ日
芳朶

七情いれ起りつるかやとの坂
、

あつしうへいふ深やと
許白

鳥目し人乃眼ましと
、

善代香も梅の賦乃や筆始
蘇仙

遠葉乃さくくやむ免の枝起り
、

萬葉中かきん扇をとり
虫蝶

まゝか浪声もけらや
、

頌 上総 小糸連

まゝのりや向くのや梅も小
會頭 仙風

愈えやうに残布に独り笑
、

何事もなくも赤厨座へ年々此神 伊丸

おしよて肌乃白しやろ此市

三舟くく川日の照りや元天窓 和風

舟止ししゆの毎日の松木く系

炉乃縁了、青とくりやと由州 翠光

かげばしに向て知し此市

美まわり滑りぬ流代乃多積 祇白

大豆まわり時や、田やまき 亭

賈亦く、中まも振向く初日少 素基

来れまゝ、錯ひ竹さうかさり鏡

ま丸か長生殿や、月日共出 待月

ゆゝと、此裾の換核や、月飾

戦さる月、鑿斗目のまや、宿業 素文

乃よりい、又括別や、衣今も、茶

春、く月や、山さるも、小名、八重屋 素歌

一と、ま丸さ、は、若や、か、貝、餅

山松乃、糸の、ひく、中、青、り、糸 素嵐

世の塵を、筆、筒、に、納、て、年、暮、ぬ

門松の衣紋の照りやまふより 直水

遊業乃蘇麻も安ととと一平 松堂

昔今あそび咲乱編とや瀆餅 松堂

毎啼の夢語りして春清ぬ

頌 豆州 大見連

涙のいさ種腐んたふらくは 嵐橋

まゝも中相寄せくわくは言 細流

ゆくはや塵もあもあまの言 細流

りともや心もほぬ川の言

牽うらあけさうし今能の言 蛙石

除夜交て定教むめるる白ひうか

えりや実能アツ鶏の声 柳翠

いさ鉄へん柳の形ふくの言

む川ま〜く新〜く〜松かきり 东郎

笑とももりて研くや 西村市

えりや何取も不老の川も 松堂

枕乃そふ〜もや〜う〜此門

遠業了〜く〜川い合とわ 壱ヶ池 逸風

房別壱ヶ池の言

く波の溜ぬ岩や佛 濟

頌

上總 天神山連

松竹の中了宝珠やく月日此か 卧雪

こほくくろ拾ふ多り幸此百千色

換漉のりき袋やと物此 葉亮

永既も我家此梅やと 離

是小強と多く物か 玉乃去 加候

師定なもたもきくむや梅の倉

生起りの皆ぬう実や日此 其光

めり今小深の燈やと 夜

初とくや磨き出 玉更磨 孤竹

初花のつらくや除秋の風

人の氣も初くゆむや初此か 和葉

縁掃て涙くきき巻う那

頌

武品 神奈川連

象園のまい事ふり海乃面 芷江

餅花の柳了去な高 葉

る水小磨くま 玉此去 閑江

結合此等とかがりや〜此等、

くけい夏すや門のかさりも小松系 蟾舎

餅搗やむい板乃香海〜、

えりや又あり〜海系終の善 藤志

餅むろ是〜て月の田毎う布、

門齋〜布おがもまれゆふ縁 止由

餅搗〜ゆふや田の神山の神、

蓬菜の徳ふかふかちり〜ふ〜うらぶの節 逸圃

子の着おかりて舞〜くや〜年忘〜、

梶の系〜了試〜さや〜り〜も〜や 亜案

掛名〜了嘘と廊の一〜次〜う布、

氣のゆ〜ゆ〜水のゆ〜ゆ〜や生交初日也 魯石

〜これ洲の後〜守あり元拂ひ、

頌 相州 田村連

志のめの先〜一袴やかさり海老 素林

愈々や〜る白の位〜と敷 泣男、

冷〜い種や〜盡〜了合〜ふかあ〜し〜ふ 山叟

貧福〜多〜人小〜し〜と〜つれ〜し〜れ〜香、

二節

梅はくやかのあはくは朝日

素簾

歳暮

枝くは孫き炎くはは枝

立

青陽

後とめや棄れ糸を延てり

龜遊

心下入極了くは日

子光

麗ふ天文臺に書はてりて

素丸

春真

日の孫くは露のあはくは葉細

龜抱

歳末

枝は入梅了くは葉や疎くは

回く

頌

例の梅小初日を青く

梅の枝了、青の影、影の月日か

子光

空の雲、雲の影、影の風、風が揚り

げんのりの空、屠蘇の白ひわらふ

老翁

花の影、移る影、影の餅

橙や、蓬萊山、山の日、日は

玉葉

筆筒うら、月、香、香や、衣、衣の

の初、初、初、初、初、初、初、初

香友

餅、搗、搗、搗、搗、搗、搗、搗

襟、襟、襟、襟、襟、襟、襟、襟

琴糸

君、君、君、君、君、君、君、君

平、平、平、平、平、平、平、平

里船

三、三、三、三、三、三、三、三

手、手、手、手、手、手、手、手

吟夕

日、日、日、日、日、日、日、日

世、世、世、世、世、世、世、世

梅枝

頌

頌

為^るよりや下^へ颯^と引^きや^り月^夜 桃^曉

あ^らも^もも^も沙^な新^買い^かし^のれ^香、

皆^人の^気不^味せ^りり^のま^のの^ま家[、] 四^橋

と^し此^唐や^赫い^まの^手桃^行、

杖^入く^ぬ老^来入^梅や^初り^氣、
老氣を怒りて 可業改 龜^文

一^花了^一歎^りり^けく^まの^坂、

く^りや^夜も^廣さ^は連^勝、 花^樂

一^つつ^らく^ちを^破く^や市^之や^け、

内^懐や^後壽^州、 和^鶴

室^も梅^の行^へり^り蝶^くく^み、

心^里を^出て^けり^市師^や梅^の木[、] 半^研

金^の色^南さ^とめ^が後^壽州[、] 存^雅

り^くく^まの^かき^くり^の市[、]

初^りけ^さす^や潮^も屠^蘇の^文、 呼^九

若^月花^一眼^不入^多や^解り^る、

ま^りり^やや^世の^塵も^て富^士筑^後、
行徳本卿 芳^翠

川^とく^や橋^も所^の七^変化[、]

眼^了り^くい^き丹^初や^後壽^州、
葛島大川戸 百^丸

世の中此世伽を埋るや○の君

七叶きよの孫子あり福壽州

とくももとの奥あけ言れし一燈

莞尔と梅も市をやりの芸

一とせ入千返書や市才夢

初の内了名を我名や左節月

隣々芸の少はひや垣の梅

親二人やよの月りや鏡餅

喜も形く赤や一類の○の皴

古くく山も鶴ありと月田虫

日並し一人もやいふの南

啖しめ類も小味りりる月

梅枝お行も了芸の東の夜うさ

若るやよの昔光を篋より

世の今も茶を月延し川の波

歌

房州 大津連

羅り山了着きり初夜

逢早れ牛も戻おやと一此宿

素喬

湖月

逸人

三曉

野角

瓶

吾丸

所六

第よれ事と霧多布一惠方柳 竹賦

餅搗やあふ田毎の月日星 梅詞

書よめやいの字の形り乃ん栄

ゆくとれ乃を竹さる葉竹葉

頌 甲州

稚子ア又度りりり今物乃出 井戸 素鈴

石川に葉たつ落くと一歌

ぬく歌ふふ二や物日此後とも 素曉

大将乃軍法守く大海日

頌

家く此むべふ風や松かきり 進舟

昔季ふア及々感さるや珠拂

万物の伸りややと何處 風乙

とれ矢乃射むけの袖や草おち

頌

志月 あやうりやのまほを道はて くく庭一とこの袖日うか 戸外

葉蒸やぬとてとれ懐子

安らと実々と物と恵の枝や姫小松 免来

青陽

下總

布川連

流了 嘉刺と云ふ

三つふ 不法を定む

文惠や梅を惠方にこそ之所

此桃

現乃海を煮くまれば来り

野叟

水三日を徒にふるも轉りて

朱丸

春真

陽光を法にさし新筆は

此桃

歳暮

去後下曲の雲霞摺也

因

歳旦

同所

一も童小立より上下も

若りの一やと云

若くして

入りや穉着れ能てかきぬり

麥丸

ふ卦か一里入運も太著

野叟

里豊く候く都に華多所や

茂楓

二篇

後より笑ふ心あり架二日灸

麥丸

歳暮

あけのついでに積りて今より

麦丸

能い子の胸箒用や玉れくく

布川 米丸

珠抄や女僕れ治いゆきま

日雲乃真ゆりさやまれま 里翠

三層うい月不松賣人を忘えうま

あまや波崎殿の伸び始め 素立

金葉うた喜も世話し死師をふ

虚い美を和け実い金を補ふ

内松や秤かしくぬじからん 鳳竹

煉掃れ赤例や家の智恵袋

深くゆき夢を穿たりる月鳥 子各

挨拶も怪しいのや一年れ著

並右うたみとうの糸や小夏系 水長

愈え寝る多鶴ふ守ん年れ店

人のこゝろも解あや松ふ初日此か 河景

小利根了えゆやの事

けんりのや旭さく入歌ゆきうか 龜崎

借袋の星乃付来り云見う仰

遠葉や一皆冬年れ不定め 親 風和

愈えりふ嚏させとく言れ

叢筍の降。ふ陽くは宝 糸 素柏

こまつけてししの漆乃破る巾 山長

角さぬ付ふ放りりふ乃去 北窓

世れ中もふりり解てしし物

ふくくふふ同くや夜寿州

算盤乃塵がらりふし大海日 市直

今限了まは縁りし初日す 素甲

煤掃やも智作らよふふ

まふやまふの物飛くは遠い

世々是若くは及りかきり松

く月をや流も長閑ふは南此喜 烏月

尻き夢い市此も鶴や言は夢い

えりやそのふも廣きとふ 巨川

一是若くは林系や大二十日

結付て空く橙のく月日ふ 智丸

上アウ物くとして夜結り

世も静しゆいすすは松若筋 素甲

と此衆のり事さるや古磨

海もふりく浪や一葉をくく先 而者

ありまき船舟て修やとく此波

土味ムニコトハニ細銀や一玉此 素英

無念と八條目やとく此言

信りやもそのまりあり信初 中ヤ 一風

の浪の沖ふんはるる鯨船

世乃中ちを九子初の上のおく船 新 竹 里

世の中の師 よめいのみまひりしうら 志志とくしや梅のお

我々 ちと 義小隠とくや一室舟 十三雙 白壽

橙も我ア一似とくお葉書く舟

柏子此中くくおとく初日くか 車太

今めお幕を開く一 大ニ二十日

着 立傍 初日小綴此の めく 右仙

まき厚栴乃達者や一又月帯

美 あま や こころ の波とくお星此糸 佳風

謀搦てえ日けいよのかく舟

白念ふて玄開ア一笑ふ初日く 田川 神鳥

何事も仮名て書くし師走くか

民神も天の岩戸やぬの妻 麻屋 幡潮

日清しそ名跡をくぬ年一原

あそべとの葉の廣くもれま 野 野

香深をよて暮るぬ桂の舟 立 立

無きやちかひの思ひ 同 同

一しを此時斗志うけりたる 武州草加 冬松

嘘つうぬ人とや 此林の花 文雅

仙人了 福志又 橋場

愈々や野馬臺此詩のり度り

石原連

うぬもわか糸ち小使ふ家のま 徳布 徳布

まきやや蘭度小亭白ふり 立 立

しりの市を何有の師小字 立 立

立並ふ家眩し 来二 来二

まきもや一葉し 立 立

箕束おのり 立 立

おのり 立 立

おのり 立 立

一とを乃こや 紀りこころ月唐 窓旭

まやまの 諸納まより年此等

この心も 侍りうけふ初日か 川角

翌日ゆく 果報や 除夜の祓毒州

新玉や 綿織ゆを 幼り糸 古柳共言 急雪

餅搗や 下戸も 上戸も 天窓放

好二重れを 可 紋ましく 月日 下窓戸内 野牛

我をかり 去乃 氣急や しく此梅 下窓戸内 獅庭

組つけて 門乃 衣紋や 加さり 葉

吟 梅い人の 師を 忌見う 柳

くひもや 笑し 柳代の 餅 漢 文調

梅 花枝 折る けりや 衣を たり

頌 甲州 高室連

孫や 件とて初難ふと云 子れ 鶴の けり 喜や 松 橋 二橋

り しく 夏を 為や 不二乃 雪

是の しく 冬を 為 初 武九

眩曲て 冬 花や 武九

えりや 春も 冬や 橋 采風

餅搗や、事かた修む此玉たしき

湯沸すく煮い居く、大并一卧純梅 梁砂

頌 同 武川連

連（りり）百後毒州のくふれは 素明

市立れ森あり除夜の響物、

若くもや、心の笑ひ乃く、表 珠山

ふふ人老の穉くや、心の塵、

子ふ後新集も縁りや、心の初 銀砂

破くもふ二度の金取りの心、

頌 武州 新方連

而まほやソリ身くりて花のま 會頭 敬林

と、心尾や常地の染もく、心のせ、

名ふめく、心日と送くまや、心後毒州 柳川

ままぬと眠るしてや、心後毒州、

明の戸此け、心と長保や、心後毒州 芝和

名取も皆寄集り、心師走く那、

月半日此白り合まや、心後毒州 素水

筋細ちと縁りよま、心や、心後毒州、

幾多里口海静や 君々を象 梅之

川あり松ありも年此や 文秀

正直の形をそふてか 文秀

兔亦乃矢の根も強し 文秀

ま多れ夢も初る 硯壽

山ハ若里ハ謀多し 硯壽

一云落小如も伸川 紫山

内外乃掃除も出芽て 紫山

頌 奥州 岩城連

梅乃香了 自秀

よ一應一此改不る 自秀

梅乃香や 上路

襟風や 上路

神柄や 素樂

手乃香 素樂

柳乃も 素樂

心乃放り 素樂

頌 武州 松伏連

田代りや 籠り 秋入実入る 素舟

川りや 人より 狸あり 涼花

山も 裾より 伸 涼花

大海日 表の 方 十八 洲 舟

頌 房州 那古連

く月も ちや 鳥 籠り 玉 笄 里九

云乃 葉も ぶ 水 井 此 師 老 徒老

去る 月や 星の 氷 此 徒老

よの 一 夜 之 子 也 也 大海日

足 後 しく 登 乃 出 花 や 浦 の 雲 登々

津 上 表 も ちや 年 此 如 心 年

えりや 橋 不 限 あり 人 之 路 年

餅 系 の 首 や 雪 此 裏 士

夕 夕 乃 ち 梅 花 あり 也 也 病 犬

保 の 日 や 大 海 の 漁 り 秋

ち ち ち や 子 捕 小 里 鳳

空 いて 行 く 舟 や 音 響 也

ま ち 月 や 庭 も 代 吹 松 の 風 其 定

松中此殊春むけりし所かきり

牛歩

月云の雪もあつりし乃梅

頌

下総

布川連

松並く中とくまゝしる月夜

文順

法よりや隣のみまゝあはれん

門礼乃松の向廣く銭々云

雙神

素泉

梅一峰吟く老木れりまはれ

ふし布もろく向くもまはれ云

翠

信風

清くはる年いほくはまふり

一文字了筆法じん古書始

小遊

眺春

親の君この時多りやうはれ

多後とみかきやうはれ

福永

扣水

大名も極楽もありとまはれ

雑煮もまはれ名ありや

生枝

廉明

十二の角の法やうの角

乃鳥楯の表とやまゝしる

甘疑

子んや親の師をまはれ

頌

甲府連

五丁草も富士の底よりか

泉布

まきまのや草も枝も能く

、

正理れと玉塔一燕乃 暮

斗久

中歌寺所乞の中に静あり

、

西のや菫角ゆつり暮れ八重藤

箱戸

くやめるむとけ夕日や葉揃川

、

頌

同所

さみ水や池の行ふ鳥と 暮

真髪

荒草のや師も油行る朝の

、

暮江亭

勢も出布此二の藤園や海老投光

千極

酒を能軒もまやと

、

た月をふ少く曇結や露の夢

金美

かとこれか増屋あふ梅はさぬ

、

やんのつと浮橋や先く河原

梅英

志川りさやみれちよりれ河原

、

み松の十三節乃ま

言田 岐山

りともや穂節やと結る日

、

頌

立派ア一の月と勢日や柳子水 白芥

あゝ名の口と解けてあゝまの夢

早かる念はゆゑの尾を尺送るぬ

世の皺ア了火のーかけてや柳丹お 馬雄

鉄上の唇もねをのす威重う柳

えんやや塵と名や月りのあー 節月

硯の啼やあゝもあゝぬも柳芝うま

あゝもむらあゝ星の魚や松の 雲 三南

二十かのことーもあゝぬ柳ーあ

昔ー一それ小及系かー一忘れ

河甫 叢風

あゝとりのこゝ後のまやま月 鹿

柳風吉や梅ハ裸て空うーぬ

い糸つむや封帳の糸此あうーま 元山

横雲流子牛うーてぬ乃と糸

因而不速也されてーうぬぬ 松竹 麦叟

えんやや 脇月もあゝぬ人魚

あゝるりも人も人來と啼ー一り如

るり後や柳の月松もよりの口
馬泉
嘉新不帝の月とくは長者の

は心共

今此路秋有我の星河の初まを
蛙水
空始乃帷のや柳の志
移文
唯りのしはくく月一ぬ柳の家
子光
穰し記名おぬしは葉細
桂刈
まき帯や松乃付多此程より
不二架
結んでハ柳を急し帯の家
石漱

様はくまの柳の都の柳
梅子
子古産了の盤乃塵とる登老うか
胡光
梅を記名とくありぬ脱月
五雷
まもまぶし行登はけてきうな
素涛
腹立を柳をきんせぬ余字うか
我窓
葉のやや葉の志香又白ひ鳥
鄭波
まぶらまはまききつめは白鳥か
左櫻
山くれもあらしをききけり
梅吏

附城を扱了とくせん左席月 千路

糸瓜作し多もかき多柳うか 菊羽

伴ふふに成ても棄りか 桃曉

畜るくの片り身にのう敷きか 馬水

風を吟ふ多休めり棄りうま 鴉墨

檜柄了比敷い晴り雉子の夢 鳳吹

秋仙行

朝夕入るまひを急や梅の心 素九

庭掃一時ハ路巾さ片りた 移文

けまは古稀の賀せよととまうして 蛙水

白杵あはと餅煮いり 逸窓

ちりりりとし片とる回の十三夜 篩月

浪お水鴨とと深きりり然 風葉

と月りくれ隣のををさうして 子光

法事の志似り前原をさ 桂州

まら言れ乃を後流も波さる 馬水

物原の浮名也動く 不二賀

姫踏の口油了とる 桃曉

多り乃青い多り 回 葉 鳳吹

笑吟いのやうに此は月月の鄭 進舟

此を後とみ帯メて 中 我窓

真福の由處ふさ落し 中 上 漢水

廊下とくかふ照りに漏巻 李風

やいとわし鳥落して水のま 石漱

馬士と晴れた梅沢の岩 扇波

ぬい初雪をり碎くは處の丸を流 移文

詩のおまはにとも舞の元長 蛙水

新造のあやうく切れた多り 風 逸窓

うてえ振く春さ 惟子 節月

中堂の百日紅了 日ハ 中 沈 李風

糸くし眼けを薬換 白 子光

多ふふの寄るやい多むを多 ぬ 桂川

多あり水の筆 子あつらひ 馬水

月やぬ折小雪仍 竹 栂 不賀

清くぬやうな清 表世の中 桃曉

云てうやう孝盤のあも二から月 胡光

又紅ゆきん終あ〜りや

進舟

信く信一序も新酒も造ひ事

鳳吹

車もくもく〜人ふ不自由

石漱

口又投の物〜乃小踏あ〜

我窓

夜明け〜事候冬見露足

漢水

揚子江〜如か〜海は雄子の声

李風

雨あさましく〜庭な家〜

扇波

歳暮

三笑もか〜信原あ〜ん〜志

蓼太

む〜〜華いふか〜〜木樵

雪戈

之味錦を枕〜師老去〜にふ

我泉

愈々〜一月も過ぎ〜大晦日

曇二

サホテン 霸王樹の枝又枝ふり〜欽

楚茗

市此日や〜年此信来の志川戸

栢翁

清心露や〜蟬半此角の〜境の

野逸

若く〜も〜歩歳せ〜し〜の〜れ

奮人

春を〜も〜り若く〜い〜る〜ぬ〜枝〜う〜か

柳門

安永十せ〜

朝倉啄梓彫刻

素子叶頰を丸く今朝のこゝろ

大雅

梅うきと合せ後や除夜の夏

鳥髪

會積の梅の白く今朝のま

実うらぬに盤のゆや松の市

松風すもやや向やまのま

素角

妹掃く白髪深きく

礼礼ふ人あゝゝ冬夜故布

羽扇

居坐て直つんく此一源ふ

よももふも岩一陽や初寄竹

秋湖

大居や黙子居坐後妹納

鶯のひきもさく口方此ま

素十

音季ゆや向くく梅の妹をひ

屠蘇の香に朝日さしてや花のま

島月

金とや笑て海もく此れ

涙あく鶯くくさくく年の南

胡月

頰

武州

栗橋連

あゝさやと赤あゝもく月日影

青牛

静澄一代や梅奥も妹をひ

六州新集

南山の青く川や松かきり 砂明

分別の流をいふやゆの争

富士山とあふるせそ川流 表里

こころしき雪あもるし年々志

透賢にハまふ事斗り君さま 如水

雷の流もしき形をや除夜の雪

因十々名の流る合ふ川の西をさか 竹裡

五つ心あもれ推りし札納め

指折り四十しりくとも月夜 鳥朝

令限の園しりくさや大海日

人丸や折合ふりく系とくし久 素極改 浦山

煤掃や秋の中の一十三夜

自りそそくぬ所代や清 中田連 秋 素光

海とやまも事とまぬの争

神をわや雲のうくし不壳向 雨文

若法乃笑しき移るやい忘れ



若女
本國尾形

加賀中納言

二千二百石加洲全次
丑未成二月秀府一日沐狀

目状市馬卷物二十
全状市林相押里
加馬入を七く
上本田五十九ちや
清和漆氏

本國山城口
屋形号
大庶了

細川成中守
甚不姓
本國陸典

平陸三守

共物不リ
了な
日下川
日去ガヤ
口屋形号
大庶了
全状

献上
卷物二十
伊達

献上
卷物二十
伊達

献上
卷物二十
伊達

献上
卷物二十
伊達

前田若女
本國尾形

加賀中納言

百三万二千二百石加洲全次
丑未成二月秀府一日沐狀

目状市馬卷物二十
全状市林相押里
加馬入を七く
上本田五十九ちや
清和漆氏

本國山城口
屋形号
大庶了

細川成中守
甚不姓
本國陸典

平陸三守

共物不リ
了な
日下川
日去ガヤ
口屋形号
大庶了
全状

献上
卷物二十
伊達

献上
卷物二十
伊達

献上
卷物二十
伊達

献上
卷物二十
伊達